

荒木山通信

2021年12月
第13号
北房文化遺產
二〇二一年十二月一日

う。 どに大理石を組み合わせた
説明板があり、その見事さ
に驚かされます。これらの
説明板は他では見られず、
郷土の誇りでもありますよ



会員の手で看板を設置

田園が開け、高速道路や民家の屋根が遠く連なつて見えます。

そして山の辺の道に接した南の山裾には集落が点在し、懐かしい田舎の原風景をとどめています。

また、北房地域の七世紀を彩った中津井地域は、中津井川沿いに開けた地域で、吉備大宰の墳墓とされる大谷一号墳、五基の方墳が築かれた定古墳群など特異な地域で、この辺りの道も懐かしい雰囲気を湛えていま

北房地域には多くの歴史遺産をはじめ、天然記念物の鍾乳洞、日本一を目指しているホタルの保護活動、住民が取り組んでいるコスモス街道など沢山の宝があり、これらを生かす活動が待たれています。

私たちも、真庭市や観光協会などと連携してガイドの養成や各種のイベントを通して地域の良さを発信していくたいと考えています。多くの方々の参加とご支援を期待いたします。

入会のすすめ

掲げ、その手段として「西の明日香村・道するべ整備事業」を令和三年度事業として取り組みました。私たちの活動に合わせて真庭市北房振興局が国指定の大谷・定古墳群をはじめ備中三名城の一つ佐井田城址（中世）、また文化財の保管展示施設である「ふるさとセンター」など、新設・更新を含め本年度十三基を整備しています。

遺跡の名前	看板の数
英賀廃寺	二基
荒木山古墳群	三基(縦型)
立1号墳	一基(縦型)
玄賓僧都生誕地	一基(縦型)
下村1号墳	二基(縦型)
菊池家墓所	二基(縦型)
皆部教諭所跡	二基(縦型)

どう生かす郷土のまち 案内看板十一基

墳」や上皆部の「小田鼻古墳」は首長墳ですが、道程のことなどから今回は割愛していきます。

会では、看板設置を先行している真庭市と同様のデザインを採用しています。これらは、マップと併せて内外からの訪問者が遺跡を気軽に巡ることができるようになると考えています。

それについても、国指定史跡の大谷一号墳、定古墳群のみならず下村の古墳、立の古墳、荒木山の古墳な

国道からスーパーのマルナカと高野鉄工所の間を南に進んで、郡神社の前にて左折して、中津井の街通りを通り、中津井の街に至る通称「南部線」、続いて中津井の街通りを通り定地区からさらばに南へ進み、清常集落に在る塩川の泉の近くで国道に繋がる約五・二kmを、私たちが「山の辺の道」と呼称しています。



※ 令和四年度の会員を募
集しています。私たちと一緒に
総に北房の文化遺産を守り
素晴らしいさを知らせ、次代
に伝えていきませんか！

趣旨に賛同し入会を希望される方は、本会役員にお申
し出下さい。年会費は、
三、〇〇〇円です。令和四
年度は、三年度の活動に加
え、古墳の清掃や調査・研
修等を計画しています。

ガイドの育成や
イベントの開催を

北房文化遺産保存会

清流の女王 時代の鮎

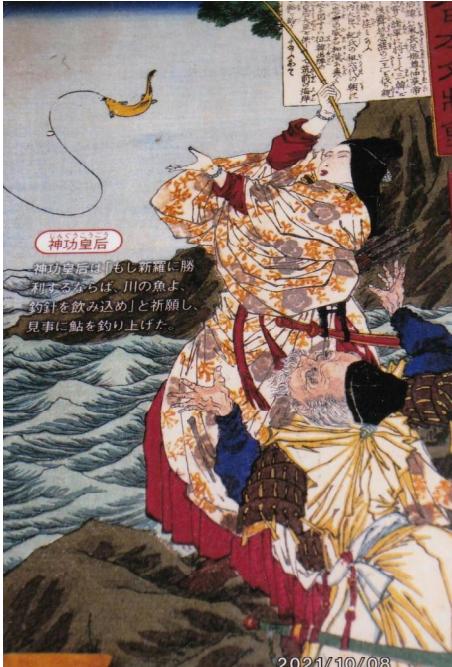
顧問

戸村彰孝

今日、令和三年十月十六日の朝刊に来年度の高校の学科変更の記事が出た。それによると真庭高校は普通科を廃し職業系の三科編成となる。時代の流れとはいえる、七〇年前に落合高校を卒業した身には殊更淋しさが身に浸みる。鮎をよみこんだ校歌の一節が懐かしい。

落合は水清き里
はつらつと若鮎踊る
はつらつと若鮎のごと
睦まじく 日々に学ばむ
旭川澄みて明るく

高等女学校から昭和二十五年新制高校として発足した時、この歌の作詩者は万葉集の研究者で校長の藤本実先生であった。当時の旭川は文字どおりの清流で竿さす釣り人の姿も珍しくはなかつた。それが僅か三年後に大きな環境変化に見舞われた。旭川ダムの完成である。高二の私は友人數人



【神功皇后の鮎つり】

(大日本名将鑑)

荒木山東塚古墳が築造されたであろう時代には日本に暦などなかつた。したがつて、考古学の世界では暦が存在しなかつた時代と場所においては、独自の時間軸が必要となる。この時間軸を設定することを「編年体系の確立」という。

土器とか石器といった遺物の型式学的分類に基づいて時間経過を示すとみられ、時間の連続の新旧の方向を決定する。そして、型式相互間の共存関係などを根拠としながらその範囲を広げ、考

と西川にできた巨大な堰堤を見学に自転車でダム沿いの曲りくねった道を走つた。

児島湾から春になれば遡上していた鮎の子は道を閉ざされたのだ。

鮎遡上の道は閉ざされ、

いわゆる陸封状態になつたが、以後漁協の努力で琵琶湖の稚魚が放流されている。

鮎も高校生も厳しい環境の変化に対応してゆかねばならないのだ。

平安時代の延喜式を見る

肥前新羅遠征を前にして九州の松浦で戦勝の可否を占つたのである。これから魚に占をつくつて鮎といふようになつたと伝える。ま

アユを鮎と表記する由来には日本書紀の神功皇后記に面白い記事がある。(五世紀頃)「朕、西方賊の国を求めむと欲す。若し事を成すこと有らば河の魚、鉤(釣り針)飲へ」とのたまふ。因りて竿を挙げて細鱗魚を獲つ。

松浦川も川の瀬(速み)の裳の裾濡れて世紀奈良時代・万葉の歌人である大伴旅人の歌を一首あげよう。旅人が九州太宰帥であつた時のものである。

鮎をとりまく人間模様を通語である。鮎と書くと中國ではナマズを指すという。鮎か釣るらむ男性の竿には鮎はかからぬいと云い伝える。余談ながら、中国でアユは香魚と表わす。日本でもアユの芳香を賞でて香魚ともいう共通語である。鮎と書くと中

古墳の建築年(下)

次号で少し描いてみたいと思つてゐるがどうなるか。

古学的年代組織、すなわち編年体系が作られる。古墳時代の場合、土師器と古墳、特に前方後円墳による編年の二本立てとされている。このように編年体系によって得られる考古学的時間尺度は、あくまでもある新型式が別の型式より古いか新しいかという、相対的新旧の時間差を集積したもので、次にこの相対編年を絶対編年にいかに近づけるかは明言できない。このため、次にこの相対編年を絶対編年にして、交互年代法の対処法として、交互年代法と年輪年代学がある。前者は、既に暦が使用さ

れている地域・国との交差年代を求めるものである。後者は、遺跡から発見された木材の年輪により推定する方法である。しかし、両者ともに限界があることは明らかである。

そこに登場したのが、放射性炭素を利用した理化学的年代測定法である。一九四七年（昭和二二）年、シカゴ大学の、ウイラード・リビーがこの測定法を発見した。彼はこの研究成果により、一九六〇（昭和三五）年、ノーベル化学賞を受賞している。



（1908 ~ 1980）

太陽からの宇宙線の影響で、大気中の窒素原子に中性子が衝突することで、炭素の放射性同位体C₁₄（通常の炭素より少し重い炭素）が絶えず作られていて、基本的には大気中のC₁₂（通常の炭素）との比率はほぼ一定である。このため、生きている動植物の体内には、

射性炭素を利用した理化学的年代測定法である。一九四七年（昭和二二）年、シカゴ大学の、ウイラード・リビーがこの測定法を発見した。彼はこの研究成果により、一九六〇（昭和三五）年、ノーベル化学賞を受賞

している。C₁₄の半減期は、約五七〇〇年である。このメカニズムを利用することによって、死後の経過時間がわかるという理屈である。

この方法は、開発以来様々な技術的改良が行われ、現在では少量の試料で短時間の測定が可能となつてきたり、測定結果を較正する国際較正曲線、つまり「歴史の物差し」の精度を高める努力も並行して続けられている。

現在では少量化の試料で短時間の測定が可能となつてきた。また、測定結果を較正する国際較正曲線、つまり「歴史の物差し」の精度を高める努力も並行して続けられてきた。まだ様々な課題はあるものの、近年その精度は大きく飛躍してきている。

二〇一一年、国立歴史民族博物館が、奈良県桜井市の大谷一号墳から出土した木材、種実、土器付着物などを対象に放

射性炭素を利用して、放射性炭素年代測定を実施し、結果が死滅すると大気中かまでの時間を、「半減期」という。C₁₄が大気中と同じ値で保たれている。しかし、その生物が死滅すると大気中からC₁₄の補給がなくなり、それ以降C₁₄は窒素に変化していき減少していく。一般に、放射性同位体が壊変してもとの量の半分になるまでの時間を、「半減期」という。

約五七〇〇年である。このメカニズムを利用することで、古墳から出土した木材や骨などのC₁₄を測定すれば、死後の経過時間がわかるという理屈である。

この方法は、開発以来様々な技術的改良が行われ、現在では少量化の試料で短時間の測定が可能となつてきた。また、測定結果を較正する国際較正曲線、つまり「歴史の物差し」の精度を高める努力も並行して続けられてきた。まだ様々な課題はあるものの、近年その精度は大きく飛躍してきている。

現在では少量化の試料で短時間の測定が可能となつてきた。また、測定結果を較正する国際較正曲線、つまり「歴史の物差し」の精度を高める努力も並行して続けられてきた。まだ様々な課題はあるものの、近年その精度は大きく飛躍してきている。

二〇一一年、国立歴史民族博物館が、奈良県桜井市の大谷一号墳から出土した木材、種実、土器付着物などを対象に放



【箸墓古墳】



【鍔形金銅製品】

に価値がある取組であると考える。

翻訳
ひるがえ
つて、北房の古墳である。以前から、これを分析したらどうだろうかと思つてゐる遺物がある。大谷一号墳から出土した鐘型金銅製品である。金銅製品としては類例のないもので、扁平な方形板の身部に細い筒状の袋部があり、木製の柄が装着されていたと考えられている。幸い、柄の端が遺存している。これを分析することで、少なくともその木片が切られた年代が推定できる。もちろん、これによつて大谷一号墳の築造年が直接推定できるわけではないが、被葬者の議論の参考にはなるはずだ。

大谷一号墳のシンボルとなるべき話題となつた。九州発表は大谷一号墳のシンボルとなつた。この古墳は、大谷一家らとの論争にもなつた。

しかし、こうした最新の分析技術等を使用して、より確かな絶対年代を追求する弛まぬ挑戦は、非常に

た須恵器から大体六七〇年から六八〇年頃に比定できるのではないか。そして、この天武朝の時期に古墳を造れる地方での階層といえれば、太宰という役人しかいないことから、吉備の太宰しかいないのではないか」と、被葬者を石川王と推定している。

『日本書紀』（講談社学術文庫）によれば、天武天皇元年（六七二年）の壬申の乱の際には、石川王は近江宮のある大津にいたことが推定される。吉備太宰石川王は、病で吉備に薨じた。天武天皇八年（六七九年）三月九日に「吉備太宰石川王は、これを聞いて天皇悲しまれ、恵み深い言葉を賜つて云々といわれ、諸王二位を贈られた」とされていることから、平井氏が比定した古墳の築造年代とも合致する。もし、金銅製品の木片の分析結果として、六七九年以前の数値が出来ば、石川王の推定論拠に、科学的データによる確からしさの根拠が加わることになる。

また、定西塚古墳の石室からは、人骨、人歯、動物

骨が多数出ており、定東塚からも西塚ほどではないにしても、人骨と動物骨（特に、二ホンザルの頭蓋骨等）が検出されている。これらを分析すれば、古墳築造年に直結するデータが採取できる可能性がある。



【西塚動物骨】

四十八年前、谷尻遺跡の発掘調査から出土した巴形銅器は、現在岡山県古代吉備文化財センターに保管されている。県内では二例しかない貴重な遺物である。

巴形銅器は遺跡中最大の住居跡（三世紀中頃～三世紀末頃）の堆積土中から出土した。

さらに、今後発掘調査が実現するかもしれない荒木山西塚古墳から、何らかの遺物が出土し、それが最新の分析等に供することがでありますのであれば、前述の奢墓古墳の築造年代との比較も可能となり、非常に大きな成果になるであろう。

そんな期待を持ちながら、発掘すれば報告書が発行され、遺物はただ倉庫に眠る、ということ終わるのではなく、発掘当時には叶わなかつた学術的追求課題に対して、次代の最新技術によつてそれが解決し、さらにつれることを待ちながら、しっかりと保存管理すると古墳時代の六点だが、明

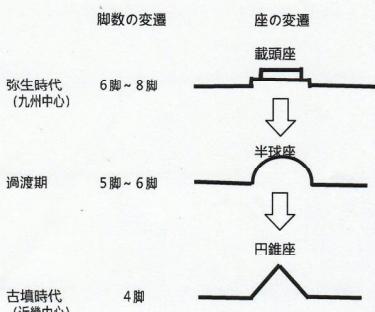
いうことが、「文化遺産を守る」ということの重要な意義のひとつではなかろうかと考えるのである。（平城元）

いうことが、「文化遺産を守る」ということの重要な意義のひとつではなかろうかと考えるのである。

意のひとつではなかろうかと考えるのである。（平城元）

谷尻遺跡出土「巴形銅器」の歴史的価値

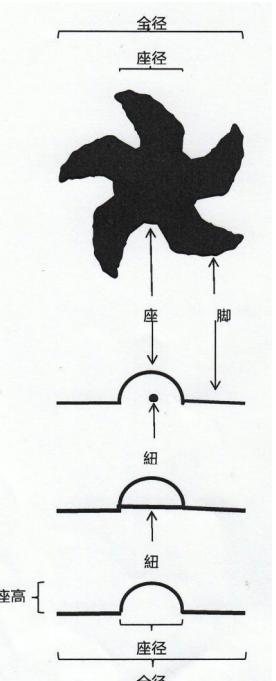
谷尻遺跡出土遺物
巴形銅器（遺跡調査報告書より）



【巴形銅器の変遷】

が興味を抱くであろう形の存在感は今も衰えていなかつた。そもそも、巴形銅器は弥生後期前半（一世紀中頃）に北部九州で発生した国産青銅器であり、特徴は座が扁平・載頭または半球、脚は六脚から八脚で左捩りが七割を占め、脚裏に綾杉紋や凸線凹線などが施されている。独特な型の由来は「スイジガイ」という貝を模したと言われるが、その他「ヒトデ」等の説もある。

出土場所は土坑・建物跡・溝などで、墓域に限られていない。儀式用として伝世されたいた可能性が高い。北部九州の有力王族が各々の勢力を拡大し誇示するため多様な形態の巴形銅器を造り、当初の副葬品から転じて盾や鞍（矢を入れるもの）の飾り金具として配布したのではないかと考えられる。



【巴形銅器の各部位】

市山陰の鳥取県では、鳥取半球座五脚右捩り、湯梨浜町長瀬高浜遺跡から半球座六脚左捩りの巴型銅器が出土している。各々脚数と捩りの違いはあるが、半球座という点と大きさ捩り角度は谷尻遺跡出土品とほぼ同じであり、出土遺跡の年代も同時代である。

この点から、当時の北房地域の首長は、その力の大きさだけでなく、北部九州から北陸への日本海沿岸経由地の因幡・伯耆の有力首長との間に深い繋がりを持つていたと示唆される。

しかし、不思議なことに弥生時代から古墳時代までの主要地域である出雲を含む島根県での出土がない。

やがて北部九州産の巴形銅器は古墳時代初頭（三世紀中頃）衰退した。しかし、再び古墳時代前期後半（四世紀中頃）近畿地方を中心として古墳に副葬され始めた。

つまり、三世紀中頃から畿内政権の勢力が北部九州まで及ぶに至り、巴形銅器も生産が縮小し衰退していく。ただ、この北部九州

市乙亥正屋敷廻遺跡から半球座五脚右捩り、湯梨浜町長瀬高浜遺跡から半球座六脚左捩りの巴型銅器が出土している。各々脚数と捩りの違いはあるが、半球座という点と大きさ捩り角度は谷尻遺跡出土品とほぼ同じであり、出土遺跡の年代も同時代である。

この点から、当時の北房地域の首長は、その力の大きさだけでなく、北部九州から北陸への日本海沿岸経由地の因幡・伯耆の有力首長との間に深い繋がりを持つていたと示唆される。

しかし、不思議なことに弥生時代から古墳時代までの主要地域である出雲を含む島根県での出土がない。

やがて北部九州産の巴形



韓国大成洞遺跡群出土の
巴形銅器

(三輪能章)

また、政権中心地の奈良県での出土は少ないが、周辺県の首長墓（前方後円墳）かその

方期（四世紀中頃～五世紀中頃）に至って、前方後円墳の大型化に伴う副葬品の多様化が進むと、畿内政権は過渡期の巴形銅器をもとに四脚の円錐座に定型化し、權威の象徴の副葬品の一つとして量産したと考えられる。畿内政権により作られた巴形銅器は、東は静岡県二箇所と神奈川県一箇所で

あり、西は千足古墳（造山古墳の陪塚）と山口県内二箇所。九州は福岡県の丸隈山古墳だけで、近畿と山陽

地域の奈良県での出土は少ないが、周辺県の首長墓（前方後円墳）かその

陪塚からの出土数が多数ある。畿内政権が掌握している勢力圏を示す。

なお、古墳期の巴形銅器が韓国東南部の大成洞古墳群の三古墳（四世紀中頃）から、倭系遺物として一〇点出土しており、近畿大和

勢力との関わりを示す。この地域は後の任那と関係が深く、今後の研究が注目されている。

巴形銅器の製造と流通は、他の青銅製品（銅鐸・武器・模型祭器）が古墳時代を前に

その祭祀具の役目を終わる

のにに対し、一度衰退するもの

の古墳時代中期前半（五世紀中頃）の大型前方後円

墳の終息まで続いた。

このように、谷尻遺跡出土の巴形銅器は、我が國の古代青銅器文化の中でも特異な位置を占める遺物であ

る。その詳細を書いた軸が同

じく、古代北房地域の歴史的評価を考察する上でも、極めて重要な資料の一つと考

えられる。改めて専門的研究を期待するものである。

宮地の湯川集落裏山の頂上あたりに昔の備中と美作の国境があり、そこに聖徳太子が開いたとされる光明山遍照寺がある。建物は落雷や戦禍により三度焼失したと言われ、江戸時代の寛文元（一六六一）年、備中松山城主水谷勝隆と作州津山城主森長継が施主となつて觀音堂（本堂）を再建している。

その詳細を書いた軸が同寺に残されている。軸は元々二本であった物を保存の為か一本にしてある。内容は同じであるが、一方では松山城主を先に、一方では津山城主を先に書いている。思うに松山城関係者と津山城関係者の訪問に合わせて掛け替えていたのだろう。

古文書の中に、遍照寺の奥に、松山城主を先に書いた軸は、津山城主を先に書いた軸である。芋代官（久松）

が、両氏が断絶となつて以後はそれも叶わず困っているので近村へ命じて屋根の葺き替えができるようお願いしたい。」

といったもので、宛名は井戸平左衛門（代官）となつてある。

「両城主が居られた時は、その命で近郷から萱や縄などが集まっていた



観音堂（遍照寺）

が、両氏が断絶となつて以後はそれも叶わず困つ

ているので近村へ命じて

屋根の葺き替えができる

ようお願いしたい。」

といったもので、宛名は井

戸平左衛門（代官）となつ

てある。

※ 井戸平左衛門（井戸正明）

江戸時代中期の幕臣。

享保の大飢饉の折、窮

民救済のため、数々の

施策を講じた。芋代官、

芋殿様といわれ慕われた。

（久松）

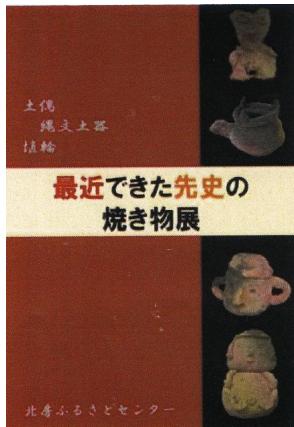
企画展の図録・中津井の地図の完成

地域おこし協力隊として活動している橋高です。私は北房ふるさとセンターで歴史体験活動をして、地域の歴史活動を盛り上げたいと活動しています。

今年度は「いにしえ体験講座」という、主にモノづくりを通して歴史に関心を持ってもらい、北房の歴史や郷土にも目を向けてもらうということを目的にした講座を開催しました。対象者は、北房・真庭に住んでいる人や歴史に興味のある人で、老若男女問わず募集しました。



【野焼き】



【ミニ企画展の図録】

(橋高七海)

（橋高七海）

（橋高七海）



ジです。必要であれば、橋高にご連絡下さい。北房図書館・中央図書館での閲覧もできます。

また、中津井の上町・下町の町並みの地図も完成しました。

湯原の社地域には、中世の神社や御堂、石造物など数多くの歴史遺産が点在しています。また、古い形をとどめる祭や行事も残っています。

場所では、説明板や写真を手に地元ボランティアガイドの方の説明がありました。

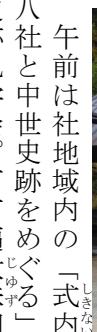
我々遺産保存会でも参考にしたいところです。

十一月十五日（土）、標記の題で社中世歴史シンポジウムが開かれました。

午後は、湯原ふれあいセンターを会場に歴史シンポジウム。蒜山郷土博物館の前原館長の「式内八社」と中世仁和寺支配」と神戸大学の黒田名譽教授の「建築史から見る大御堂の歴史的意義」の二つの基調講演。



この地図が真庭市の地域おこし協力隊が作っている冊子の付録になります。製本も終わり、配布可能となっています。地図を見てみたい、記事を読んでみたい、どちらも必要ない。こちらも必要であれば橋高にご連絡下さい。



午前は社地域内の「式内八社と中世史跡をめぐる」史跡見学会。百万遍数珠回しが行われている寿永四（一八五）年創建？とされる大御堂。秋の大祭で式内八社の神輿が一堂に会する神集場。神輿が一堂に会する神社の神輿が一堂に会する神社など見学して回りました。それぞれの

波良・刑部神社など見学しました。（畦田）



場所では、説明板や写真を手に地元ボランティアガイドの方の説明がありました。我々遺産保存会でも参考にしたいところです。